

秋田県の乳がん検診成績－中間期がんを含めて－

戸堀 文雄、佐藤 雅子、原田 桃子¹⁾、明石 建、井上 義朗²⁾
 1) 秋田県疾病登録室 2) 秋田県総合保健事業団

【はじめに】

秋田県の乳がん検診の精度管理としては要精検率、精検受診率、がん発見率を指標としており、中間期乳がんはこれまで調査されてこなかった。国立がんセンターの「乳がん検診のためのチェックリスト」では検診受診後2年未満に発見された乳がんを把握しているかの項目があり、中間期がんを把握することが乳がん検診の精度管理に必要であると考えられている。これらより秋田県の乳がん検診の実態を調査するため中間期乳がんの検討を行った。

また、国立がん研究センターがん予防・検診研究センターの「有効性評価に基づく乳がん検診ガイドライン2013年度版」によるとマンモグラフィ単独検診がこれまでの視触診併用検診と同等の推奨レベルとされた。秋田県では今後このガイドラインに従いマンモグラフィ単独検診が行われると推察されることから、マンモグラフィ検診の精度を検討した。

【対象・方法】

対象は2006年から2011年まで秋田県総合保健事業団と秋田市医師会及び市立角館総合病院が行った乳がん検診受診者80,663人である。主に市町村の受診者であるが一部職域の受診者が含まれていた。このうち検診受診時に「異常なし」と判定された73,406人について年度毎に秋田県地域がん登録の乳がん登録者と照合し、検診受診日と医療機関の診断日が2年未満のものを中間期がんとした。また、2年未満で診断されている例であっても発見経緯ががん検診とされているものについては除外した。

【結果】

2006年から2011年の秋田県乳がん検診成績は表1のごとくである。受診者は2008年に一時低下したがその後次第に増加している。精検受診率は年度ごとにしたいに低下しているが、全体では9.00%と高い要精検率であった。乳がん検診受診者80,663人中発見乳がんは184人、0.228%であった。一方中間期乳がんは41人、0.051%であり、発見乳がんと中間期乳がんの比は1:4.5であった。中間期乳がんの発見経緯は健康診断・人間ドック3人、他疾患経過観察中2人、自覚症状・その他36人であった。そのうち健康診断・人間ドックの3人中2人、他疾患経過観察中の2人中1人、症状受診・その他の36人中1人は非浸潤性の導管内癌であった。また自覚症状・その他の1人は乳がん発見時に遠隔転移を伴っていた。

表1 秋田県乳がん検診成績

	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	計
受診者数	11,992	11,961	9,870	13,798	16,163	16,879	80,663
要精検者数	1,450	1,269	852	1,217	1,227	1,242	7,257
要精検率	12.09%	10.61%	8.62%	8.82%	7.59%	7.36%	9.00%
精検受診率	88.18%	84.41%	84.88%	84.83%	82.90%	82.90%	84.77%
発見乳がん数	30	17	31	44	32	30	184
がん発見率	0.250%	0.142%	0.314%	0.319%	0.198%	0.178%	0.228%
中間期がん数	10	3	5	5	9	9	41
割合	0.083%	0.025%	0.051%	0.036%	0.056%	0.053%	0.051%

表2 中間期乳がんの発見経緯と病巣の拡がり

発見経緯	病巣の拡がり					計
	上皮内	限局	所属リンパ節転移	遠隔転移	不明	
健康診断・人間ドック	2	1				3
他疾患経過観察中	1	1				2
自覚症状・その他	1	23	9	1	2	36

表3 年齢別発見乳がんおよび中間期乳がん数

	年齢					計
	～39	40～49	50～59	60～69	70～	
発見乳がん	1	30	54	74	25	184
(うち視触診のみの発見乳がん)		3	4	5		12
中間期乳がん		9	18	9	5	41

表4 秋田県乳がん検診におけるマンモグラフィの精度

	年齢					計
	～39	40～49	50～59	60～69	70～	
検診発見数	1	27	50	69	25	172
中間期乳がんおよび視触診のみの発見数		12	22	14	5	53
中間期乳がん(非浸潤性)		1	3			4
感度	100%	69.2%	69.4%	83.1%	83.3%	76.4%
特異度	90.5%	86.6%	90.7%	92.7%	94.8%	90.9%
感度(非浸潤性中間期がんを含めない場合)	100%	71.1%	72.5%	83.1%	83.3%	77.8%

図1 対象地区MAP

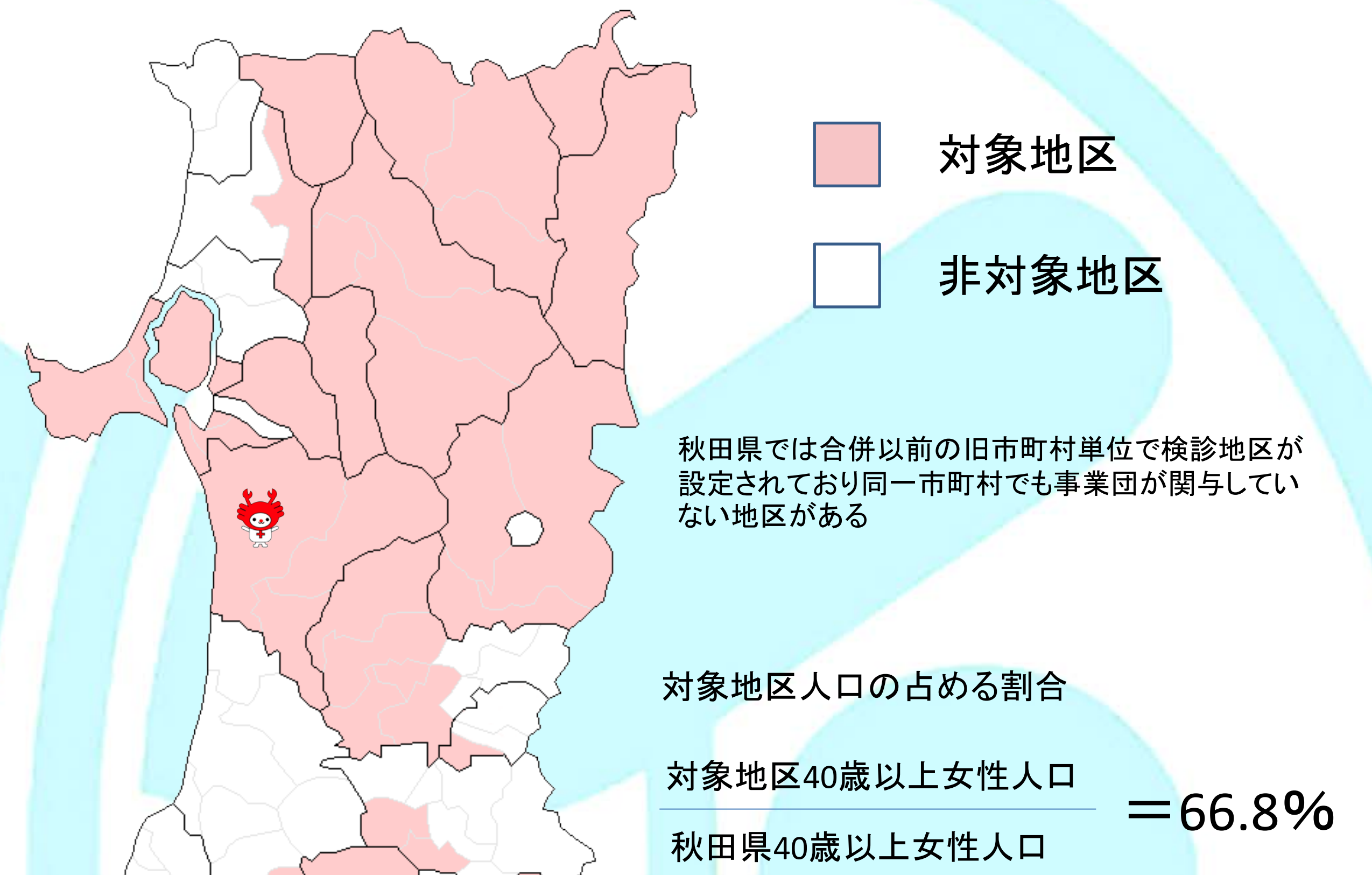
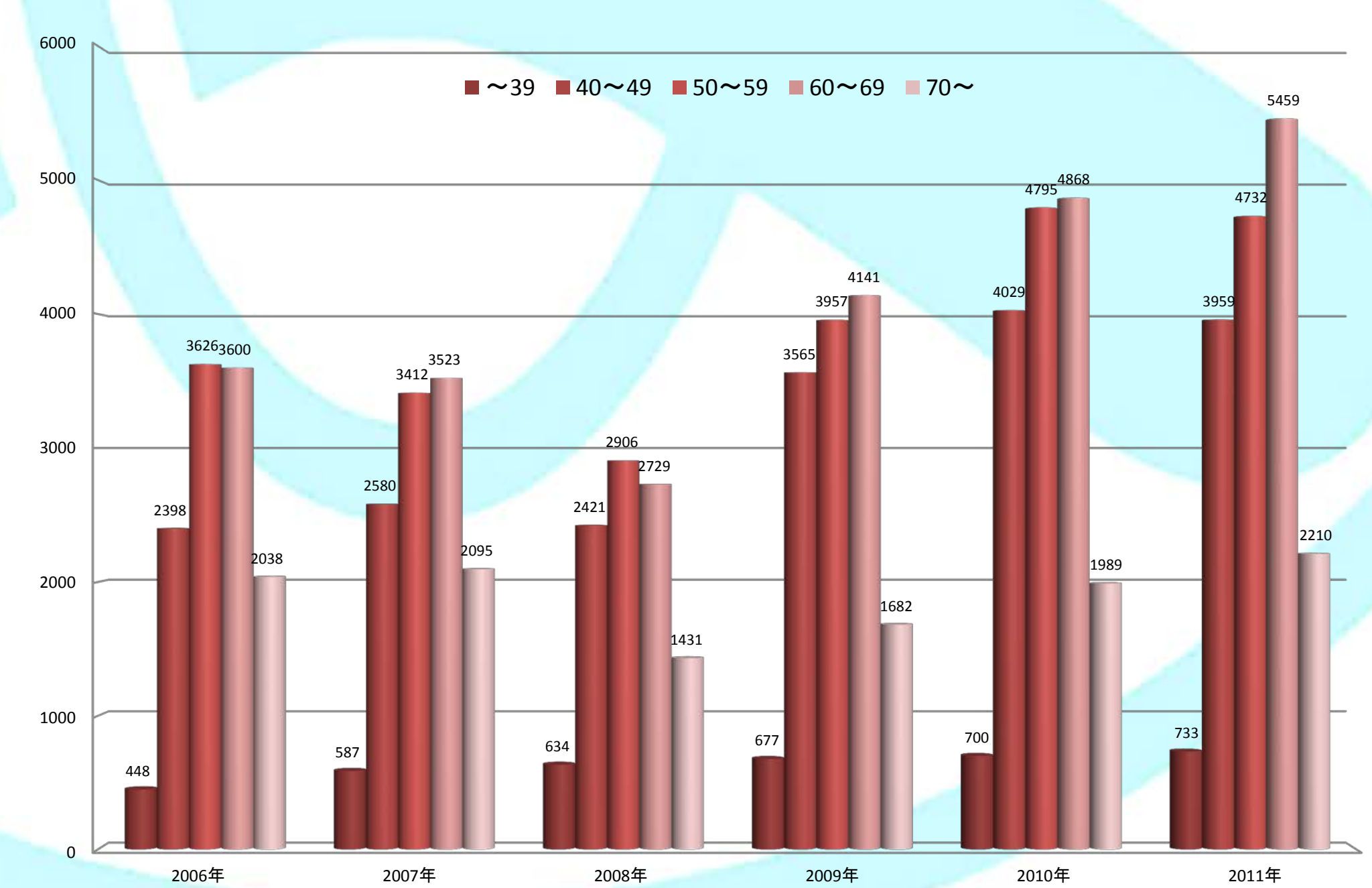


図2 年齢別受診者数



年齢別発見乳がんでは60歳代が74例で最も多く、次に50歳代54例、40歳代30例の順であった。一方中間期乳がんでは50歳代が18例で最も多く、次いで40歳代と60歳代が9例であった。また、発見乳がんにはマンモグラフィで異常と判定されず視触診のみで要精検となった12例が含まれていた。秋田県乳がん検診におけるマンモグラフィの精度は中間期乳がんおよび視触診のみで発見された例を偽陰性例とすると40歳代及び50歳代の感度は70%未満であり、60歳以上は80%を超えていた。これは非浸潤性の中間期がんを除くと40歳代、50歳代ではわずかに上昇したが70%前半の数値であった。

【考察】

日本対がん協会の2010年の成績では要精検率6.2%、がん発見率0.23%であり、これに比較すると秋田県の乳がん検診は要精検率が高いが、がん発見率は全国とほぼ同じである。また中間期がんの中に発見時遠隔転移を伴っていた例がみられていることから、検診の精度を向上させる必要があると考えられる。またマンモグラフィの精度は40歳代、50歳代でほぼ70%であり、60歳代、70歳代と比較して低かった。今後マンモグラフィ単独の検診が開始される場合には検診時に視触診を行わない代わりに保健婦による啓蒙活動を行い、自己検診を定期的に行わせるとともに、年齢によっては超音波検査などの新しい検査方法を追加することも検討するべきと考える。中間期がんの調査を行うことは検診の精度管理に非常に重要な役割を持っていることを改めて示した。今後がん登録推進法が施行されることにより中間期がんの把握もさらに充足すると推察できる。そのデータをマンモグラフィを読み取る医師などや検診を担当する医療従事者に還元することによってがん検診が充実すると考えられる。



秋田県総合保健事業団



ピンクカニクマ